

「よい研究」の条件と種類

浦野 研 (北海学園大学)

urano@ba.hokkai-s-u.ac.jp

0. はじめに

0-1. 要旨

英語教育に関わる研究を行うとき、まずはその研究を何のために行うのかを明確にする必要がある。その上で、その目的を達成するために適切な研究課題を設定し、さらにその課題に対して適切な研究手法を選択、決定することが重要である。本セミナーでは、実証研究（何らかのデータ・情報を集めることによって研究課題に対して答えを導き出す研究）を中心に取り上げ、英語教育研究の文脈における「よい研究」の条件について具体例を交えながら提案する。同時に、研究の種類として考えられる主な手法を紹介し、研究立案の段階で研究課題にふさわしい研究手法の選び方についても議論したい。

0-2. Acknowledgment

この資料は、筆者がコーディネーターをつとめている中部地区英語教育学会の企画「英語教育研究法セミナー」の内容に基づいています。詳しくは <http://www.urano-ken.com/research/seminar/> をご参照ください。

1. 研究の目的

1-1. なぜ研究をするのか

- 仕事だから？
- 就職のため？
- 知的好奇心？

1-2. 研究 (research) とは

- *Research* is a systematic process of inquiry consisting of three elements or components: (a) a question, problem, or hypothesis, (b) data, and (c) analysis and interpretation of data. (Nunan, 1992, p. 3)

1-3. 研究の目的 (ゴール)

- 自分の授業をよくするため → アクションリサーチ
- 自分の授業の向上のみを目的とせず、一教室レベルを超えてより一般化されたものを目指す → 他の研究や関係者に影響を与えることを目標とする

よい研究の条件1. ひとりよがりでないこと

- ひとりの研究者が一生涯にできることは限られている。ごく一部の人間を除いて、自分ひとりで新しい研究領域を開拓し、確立するという野心は持たない方が賢明。
- 自分の研究と他の研究との関連性を明確にできない場合、自分以外の研究者に認知してもらえない可能性が高い。
- 英語教育研究というフィールド全体の発展に貢献する研究を行うことが重要。自分の研究が他の研究とどのように関連しているかを意識する。一つ一つの小さな研究結果の積み重ねが、フィールドの発展、前進へとつながる。
- 関連して、常に全体像への意識を失わない。「英語教育研究」という地図があったとしたら、自分の研究活動が何丁目何番地で行われているのかを認識する。

2. 研究の手順

2-1. 研究テーマの選定（研究の出発点）

- 英語教師として、また英語（や他の外国語）学習者としての自分の経験や関心
- 大学（院）の授業や研究会等
- 学会発表等、またそれらをまとめた研究誌、論集等
- 英語教育に関する先行研究や、それらを概観した書籍
- 文献データベース（CiNii, EBSCO Host, ScienceDirect, IngentaConnect, ERIC, Google Scholar 等）
- 英語教育関連分野（心理学、教育学、言語学等）の先行研究や、それらを概観した書籍

2-2. 研究課題の絞り込み、関連づけ（先行研究の分析）

- (1) 選定したテーマが、英語教育研究ではどのような切り口で扱われているのかを把握する。該当する関連研究がない場合には、（可能性はとても低いが）その観点がとても斬新で画期的なものであるか、英語教育研究としてはあまり「面白くない」ものであるかのどちらかであることが多い。（よい研究の条件1を参照。）
- (2) これまでの研究で、何が調査されてきたか、これまでに何が判明しているのか、また何がわかっていないのかを検討する。
- (3) これまでの研究の問題点（理論的欠陥、方法論的問題等）を検討する。
(1) - (3) がいわゆる文献研究のプロセス
- (4) (2) と (3) をもとに、自分が何を研究すべきかを導き出す。

2-3. 研究手法の選定

- (1) 先行研究の分析をもとに、今回の研究で扱う研究課題（research question）を確定する。
- (2) Research question の答えを導き出すのに最もよいと思われる手法を選択する。「はじめにアンケートありき」や「はじめに実験ありき」ではなく、「この research question には、この手法」といった手順で検討することが重要。

4. 研究のまとめ、発表

4-1. 情報発信のすすめ

- 研究は、人目に触れないと意味がない（よい研究の条件 1 を参照）
- 口頭発表も大切だが、やはり論文執筆&掲載が重要（口頭発表の聴衆<論文の読者）
- 発行部数の多いジャーナルに投稿する（より多くの人に見てもらいたい）
 - インパクトファクター（IF）という考え方
- 研究領域の近い人に見てもらおう（できれば引用してもらいたい）
- ウェブによる自己発信（Google の威力はあなどれない）
 - 未発表の論文や、発表時に作成した配布資料の掲載等

4-2. 論文の書き方（某ジャーナルの審査項目）

- (1) 読者の興味関心に合った内容か
- (2) 提示された問題の適切さ
- (3) 先行研究提示の適切さ
- (4) 研究の枠組み、手法、手続き
- (5) 議論・分析と結論
- (6) 論文執筆力
- (7) APA スタイル準拠
- (8) 総合的にみた論文の質

5. 参考文献

5-1. 研究法全般に関する書籍

- (1) Seliger, H. W., & Shohamy, E. (1989). *Second language research methods*. Oxford: Oxford University Press. [ハーバート・W・セリガー&イラーナ・ショハミー（著）、土屋武久・森田彰・星美季・狩野紀子（訳）（2001）. 『外国語教育リサーチマニュアル』東京：大修館.]

研究とは何かについて扱っている。研究法を勉強する最初の一冊として読むのによいが、原著はすでに 20 年前に出版されたものなので、扱われている話題や参考文献は古さを感じさせる。

- (2) Nunan, D. (1992). *Research methods in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

こちらも Seliger & Shohamy (1989) と同様の目的で執筆されているが、特にさまざまな研究手法について丁寧に紹介されている。

- (3) Dörnyei, Z. (2007). *Research methods in applied linguistics*. Oxford: Oxford University Press.

質的・量的両方の研究方法について、データ収集、データ分析、そして論文の執筆に至るまで、具体的なアドバイスが豊富。

- (4) 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）。『心理学研究法入門—調査・実験から実践まで』東京：東京大学出版会。

英語教育研究を扱ったものではないが、調査研究や実験研究だけでなく、観察・面接・フィールドワークといった質的研究やアクションリサーチ等の実践研究といったものを含めて網羅的に解説されていて、様々な研究方法について概略を理解するのに役に立つ。

- (5) Brown, J. D. (1988). *Understanding research in second language learning: A teacher's guide to statistics and research design*. Cambridge: Cambridge University Press.

- (6) Porte, G. K. (2002). *Appraising research in second language learning: A practical approach to critical analysis of quantitative research*. Amsterdam: John Benjamins.

Brown (1988) と Porte (2002) はそれぞれ研究論文の読み方を紹介する形で研究方法についての理解をはかる内容となっている。前者は特に基本的な統計処理も含めた実験系、調査系研究の紹介が中心。

- (7) American Psychological Association. (2010). *Publication manual of the American Psychological Association* (6th Ed.). Washington, D.C.: American Psychological Association.

応用言語学（含英語教育研究）関連のジャーナルの多くは投稿論文がこのマニュアルに従うことを義務づけている。文献引用の表記の仕方の参考資料と思われがちだが、論文の構成、句読法、文法、統計、図表の書き方等論文執筆のすべての段階における詳細な指示があるので、一度は目を通すことをおすすめしたい。

5-2. 英語教育研究の動向に関する書籍

- (8) Schmitt, N. (Ed). (2002). *An introduction to applied linguistics*. London: Arnold.

外国語教育（応用言語学）研究を、「言語と言語使用」、「応用言語学の主要分野」、「言語能力と測定」の3つのセクションに分け、さらに細分化された個々の項目を、その分野の第一人者がそれぞれ20ページほどにまとめてある。読みやすく、各章ごとの参考文献欄も便利。

- (9) Davies, A., & Elder, C. (Eds.). (2004). *The handbook of applied linguistics*. Oxford: Blackwell.

Schmitt (2002) と同様の目的で編纂された一冊。

(10) 小池生夫他（監修）、SLA 研究会（編）（1994）『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』東京：大修館。

(11) 小池生夫（編集主幹）、寺内正典・木下耕児・成田真澄（編）（2004）、『第二言語習得研究の現在：これからの外国語教育への視点』東京：大修館。

Schmitt (2002) や Davies & Elder (2004) と同様の目的で編纂された 2 冊。日本語で書かれているので気軽に手に取れる。後者は前者から続編のようなもので、最近の研究を中心に取りまとめたもの。章によっては入門レベルを超えていて、背景知識抜きでは読みにくいものがある。自分がこれから研究をしようと思う分野について、手っ取り早くその動向を知ることができるのは便利。

(12) 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（2009）、『改訂版 英語教育用語辞典』東京：大修館。

英語教育研究（研究法も含む）に関する重要な用語 930 をコンパクトにまとめた一冊。それぞれの項目の説明は分量が少ないもののとともわかりやすく、用語がすべて日本語・英語の両方で書かれているのも便利。

5-3. 主な文献データベース

研究者名やキーワードを入力することで関連する論文が検索できるサービス。有償または無償で論文が PDF ファイルでダウンロードできる（大きな大学の図書館等でアクセスすると無料でダウンロードできる可能性が高い）。CiNii は日本の論文が、それ以外は海外の論文が検索可能。検索範囲の広さでは Google Scholar がおすすめ。

(13) 論文情報ナビゲータ 国立情報学研究所 (CiNii) [<http://ci.nii.ac.jp/>]

(14) EBSCO Host [<http://search.ebscohost.com/>]

(15) ScienceDirect [<http://www.sciencedirect.com/>]

(16) IngentaConnect [<http://www.ingentaconnect.com/>]

(17) Educational Resources Information Center (ERIC) [<http://www.eric.ed.gov/>]

(18) Google Scholar [<http://scholar.google.com/>]